



## 年間第 21 主日 (ヨハネ 6:60-69)

イエスのもとに来る→信じる→肉を食べ血を飲む(3)

三週連続で共通のテーマを掘り下げてきました。「イエスのもとに来る」「イエスを信じる」「イエスの肉を食べ血を飲む」このテーマも今週で完成します。イエスのもとに来て、イエスを信じたなら、私たちはミサの中でイエスの御体と御血にあずかることができます。

ミサの中でイエスの御体と御血（ほとんどの場合御血の拝領は司祭だけですが）をいただくのは、私たちがふさわしかったからではなく、イエス様からの溢れる愛のおかげです。神が私たちにくださる溢れる愛を、私自身の体験と重ね合わせて考えてから、もう一度聖体の恵みに戻りたいと思います。

私はおよそ 30 年前に司祭に叙階していただいたのですが、この恵みが人間の努力や才能で手に入れたものだとはとても思えません。努力や才能で決まるのであれば、足りなかったと思います。私は中学 1 年生の時から成績は神学校の同級生の中で 3 番目、4 番目でした。最も優れた人が選ばれるのであれば、いつも少し足りなかったのです。

また、聖歌隊にも選ばれることはありませんでした。中学 3 年生の時、高校を卒業して福岡の大神学院に入学してから、さらに上級生になってスータンを着るようになってからも追加の聖歌隊選抜試験がありましたが、ことごとく不合格でした。

努力と才能で司祭に選ばれるのであれば、最も優秀な人が選ばれるべきです。けれども神様は、その溢れる愛で「少し足りない」私を選んでくださったのです。いざ司祭になってみると、社交性、リーダーとしての適性、将来を見通す計画性、どれも少し足りなかったのです。そんな私を神様は辛抱強く使い続けてくださいました。

しかし溢れる才能を持っていても、神様が選んでくれるかは分かりません。人によっては、才能を生かして立派な資格を手に入れたりするでしょう。その資格があれば、当然置いてもらえる地位や役割があるはずです。けれども神様が、その資格を手に入れた人を必ずそれにふさわしい地位や役割を与えろとは言えないのではないのでしょうか。

もし神様が、期待できるはずのものを与えなかった時、私たちはどう反応するのでしょうか。神様は不公平だと、怒りを表すのでしょうか。私たちは神様の溢れる愛を知っています。しかし私たちには、神様と同じ溢れる愛は備わっていないので、神様のなさり方が理解できない時に、苦しむのです。その時私たちには謙虚さが必要です。謙虚さが少し足りないので、待たされているのかもしれない。

日曜日から日曜日まで、一週間ありました。ここに集まっている（緊急事態で集まっていないかも知れませんが）私たちは、イエスを信じ、イエスを知り、愛しているからここにいるのですが、それでも一週間の間には「報われて当然のことが報われなかった」「理解されるはずのことが理解してもらえなかった」いろいろなことで怒りを覚えたり不信感を

持ったりしたでしょう。

それは、本来であれば祭壇の食卓に近づくにはふさわしくない心の状態です。ふさわしくないのに、イエス様は溢れる愛で私たちを招き、その愛の形見を分け与えてくださるのです。それで十分なのではないでしょうか。人には知られていない怒りや憎しみを持って、祭壇に近づいている。それでもイエスは赦して下さって愛の記念を与えてくださる。この世のことが思い通りにいかなくても、イエス様の愛の記念をいただいたのですから、この世のことは赦してあげてはいかがでしょうか。

私たちは今、災害に見舞われているような苦しい日々を送っています。それでも、イエスが祭壇上で御体と御血を私たちに分けてくださっています。これ以上の慰めが、私たちに必要でしょうか？イエスのもとに来てイエスを信じる者にとって、御聖体以上に、変わらない愛を見つけることができるでしょうか。できないと思います。

多くの人が、「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか」(6・60) そう言ってイエスから心と身体が離れようとしています。「あの人が離れていくのですか？」「あのような召し出しをいただいた人が離れていくのですか？」そんな出来事も起こるかも知れません。けれどもイエスの溢れる愛は、信頼に値するものなのです。

私の判断ではなく、神様の溢れる愛に、愛の記念である御聖体に、判断を委ねましょう。私が正しい判断をし、正しく愛することができる年齢に達するはるか昔から、イエスは私を呼んで、愛して下さっていたのですから。